様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０７０９

研究課題名（和文）ケア包摂型コミュニティとボランタリーアソシエーションの構造相関性に関する臨床研究

研究課題名（英文）Practicall study on the structure correlation of care inclusion community and voluntary association

研究代表者
津止　正敏（TSUDOME, MASATOSHI）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：７０３４０４７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の焦点はケアとコミュニティである。介護者を中核として組織されるボランタリーなアソシエーション(会や集い等)が、ケア包摂型ともいうべき新たなコミュニティ開発の動力装置として機能するかという極めて実践的なテーマを設定した。近年増加が著しい男性介護者の会や集いにそのフィールドを求めた。活動への参与観察、主宰者へのインタビューや交流等を通して、介護者の会や集いは「ひとりじゃない」という確かな実感に溢れ、同じような立場の人との交流は、介護生活で失いつつあった社会との接点や連帯を修復する「場」となっていることが確認された。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on “ care and community” . Voluntary association that organized the caregiver as a core (group and gathering, etc.), we have set a very practical theme whether it functioned as a power unit of a new community development should be called care inclusion model. And, major field of this study is the organizations and gatherings of male caregivers in recent years has significantly increased. The activities of each other caregivers, to realize that "not alone”. By interaction with people with similar experiences, caregivers allowed to repair the social, and caregivers are given the power to live.Care will be a new bond of community development. The driving force is the voluntary association of caregivers and supporters and the activity.

研究分野：地域福祉論

キーワード：ケア包摂型コミュニティ　ケア／ケアラーズ　男性介護者　ケアメン　介護者支援　介護者運動　コミュニティ　アソシエーション

１．研究開始当初の背景

本研究は、ケアとコミュニティの研究である。介護者を中核として組織化されるボランタリーなアソシエーション(会や集い等)が、ケア包摂型ともいうべき新たなコミュニティ開発の動力装置として機能するかという極めて実践的なテーマを設定した。フィールドは新しい介護者として社会的関心を集めている男性介護者の会や活動である。「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」(2009年３月発足)との共同研究ともなった。

本研究では、家族等無償の介護者(以下、「ケア／ケアラーズ」)を一定の凝集性持って浮上している社会集団という意味合いで新たな「社会層」と見立てている。そしてこの「社会層」は近年、コミュニティの安定性を揺るがしかねない最大化課題として社会的実践と研究双方の問題関心を吸引している。本研究ではこのコミュニティの抗争的要素を、ケアを担うボランタリーアソシエーションを触媒として正逆に反転させ、ケア包摂型とも呼べるような新たなコミュニティ開発を推進する動力源として捉え直し、ケア包摂型コミュニティの概念化を試みようと考えた。

本研究のもう一つのテーマである「ケア／ケアラーズ」を巡っては、近年最も拡張し深化した社会･研究領域の一つとなった(上野千鶴子他編『ケアその思想と実践』全６巻)。従来、家族等親族ネットワークの中に深く封印されてきた「ケア／ケアラーズ」は、この数十年間の時間推移の中でそのネットワークの統一性を分断され、家族･地域･企業･市民組織その他既存コミュニティにおける「ケア／ケアラーズ」の不安定化、そして虐待･心中･殺人という不幸な事件に接続されるようなコミュニティからの分断化･排除化をもたらす最大のコンフリクト要素として可視化している(加藤悦子『介護殺人』)。

一方、コミュニティから排除された「ケア／ケアラーズ」の実在に着目し、そのニーズの組織化･意味化を補助線として新たなコミュニティ＝ケア包摂型コミュニティ形成の可能性追求とその実践に関与しようとする学究が、社会学･福祉学はもとより哲学･心理学･文化人類学･政治学等々学際的な広がりを持ちながら精力的に展開されている(渡辺俊之『希望のケア学』、田辺繁治『「生」の人類学』、E.F.Kittay 岡野八代･牟田和恵訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』)。ここでもまたケアに向き合いコミュニティに関与する多様なケアを担うボランタリーアソシエーションの存在が強調されている。ここに、今日的な研究動向の特徴をみることができ、本研究目的とも深く関係する。

２．研究の目的

本研究代表者は、ここ数年の間、以下に記すようなコミュニティとボランタリーアソシエーション、「ケア／ケアラーズ」をテーマに研究を継続してきた(科研費補助金基盤研究〈C･20530498〉研究代表者)。また、ケア包摂型コミュニティに関して既に可視化しつつあった新たなケア担い手としての男性介護者の介護実態に着目しその支援の在り様を白書という形式で公刊し、問題の社会化を提起してきた(津止･斎藤著『男性介護者白書－家族介護者支援への提言』)。本研究課題はこれらの研究成果に依拠しつつ、「ケア／ケアラーズ」とケアを担うボランタリーアソシエーションがケア包摂型コミュニティ開発というテーマを如何に照射し得るかという問題関心を持って構想したものである。

「ケア／ケアラーズ」を軸とする具体的なコミュニティとボランタリーアソシエーションをフィールドとして、研究者と実践者との共同研究を組織し、現地踏査、参与観察、インタビュー、ケーススタディ、ワークショップなど、まさに帰納的な理論構築に依拠する臨床研究とした。

３．研究の方法

本研究は、ケア包摂型コミュニティとケアを担うボランタリーアソシエーションに関して、研究者と実践者･実践機関との学際的な研究組織を構築し、現地踏査、参与観察、インタビュー、ケーススタディ、ワークショップなどという社会臨床的研究方法を採用してすすめた。ケア包摂型コミュニティとボランタリーなアソシエーションの相関性を、男性介護者と支援者の全国ネットワークとそこに参加する会や集いという具体的フィールドにおいて探ってみた。そのフィールドの一覧は本稿後段(資料)に記してある。

研究協力者・機関・団体を含めた研究会を定例開催し、以下の項目に関する調査研究にかかった。

（1）ボランタリーアソシエーション･コミュニティ開発･「ケア／ケアラーズ」等に関する先行研究レビュー、定例研究会、公開研究会の開催を行なってきた。

（2）ケア包摂型コミュニティの概念化のための基礎研究として文献研究に取り組んだ。

（3）ボランティアセンターなどケアラーズと支援者等の多様なネットワー担当者へのインタビュー及びアンケート調査を実施し、その詳細な実態把握を行なってきた。全国各地に組織された男性介護者の会や集いの主宰団体の把握とそのリスト化に取り組んだ(リストの一部は本稿資料として後段に掲載)

（4）研究内容については、定例研究会にて分析・討議するとともに、詳細には公開研究

会にて公表してきた。公開研究会は年 1～2 回開催してきた。

４．研究成果

上記の目的と方法にて成された本研究成果、とりわけ男性介護者のアソシエーション(会や集いなど)というフィールドから今回の研究成果を整理すれば以下のようになる。

(1) ケア包摂型コミュニティの実際

男性介護者をターゲットとする会や集いには、自らの介護体験を「語る／聴く」という以外に特別なメニューが揃っているわけでもない。ただ、介護する男性という同じ立場の人と唯一交流できる場であり、だからこそ気兼ねなく自分自身のプラス、マイナスも含めた介護感情を飾りなく吐露出来る場になっている。ただひたすらに話す人、聞き上手、頷くだけの人たちが織り成す短い交歓には「ひとりじゃない」という確かな実感がある。介護によって社会との関係を絶たれた男性介護者の社会性を回復する場でもある。同じ立場にある人への思いやりや気遣いは、失いつつあった連帯感を修復し新たに実感する貴重な関係性に溢れている。介護体験記での反響に表れているような介護体験を「書く／読む」というプログラムと共に、この自らの介護体験を「語る／聴く」という体験共有の双方向型プログラムは、本研究のテーマ、ケア包摂型コミュニティの開発ツールとして極めて有効なものとして機能していた。

同じ男性という立場で介護者を生きる仲間との出会いと交流が広がるこうした会や集いは、こうして特別な意味を持つことになる。「自分ひとりじゃない」「特別なことでもない」「大変だが、もっと大変な人もいる」ことを実感する場や空間、時間を介して、これまでの日常生活から排斥され「非日常化」された介護という暮らし方が、誰にも避け難い日常の生活になるという普遍的舞台へと転換する。つまり、暮らしや介護の再帰的日常化である。現代社会を長らく支配する市場原理とジェンダー規範を最も強く内面化した男性たちが、その実生活を通して脱市場、脱ジェンダー化する過程である。本研究課題としたケアを包摂するコミュニティの存在意義を人の普遍的関係性の萌芽という所以である。

(2) ケア包摂型コミュニティの意義

このような集いや組織の存在意義はどこにあるのだろうか。

多くの男性の場合、企業戦士という言葉もあるように、仕事が生活の全て、時間の全てのような生活を余儀なくされてきた。介護者となる中高年の男性の場合は特にそうだと思う。親や配偶者の介護が始まれば、仕事と介護の板ばさみなって、結局は離職に追い込まれる人も少なくない。むしろ多くの人がそのような不安を抱えながら暮らしているはずだ。介護による離職は、介護者の経済的安定を奪うばかりでなく、同僚や友人という親しい関係、コミュニティをも奪っていく。特に、地域との関係を作ってこなかった、男性介護者の孤立は、虐待や心中等々といった不幸な介護事件の温床としても深刻な影響が指摘されている。

介護を、堅固な意志で気構えて介護役割を引き受ける人もいれば、こんなはずではなかったと戸惑いながらも介護する人もいる。いずれもがこれまでの暮らしの「延長」とは一線を画するという意味では男性介護者の典型である。女性のように慣習という日常化された介護実態とは様相を異にするような、これまでの日常とは全く様相を異にする「非日常化」された暮らし、介護こそが男性介護者の介護実態を特徴づけるのだ。

「非日常化」された介護生活は、下記に知るような介護を担う者のこれまで日常をすべて排斥する。これまで長期に亘って大事に培ってきた社会との接点を奪い去っていくということだが、本研究との関連でいえばここにこそ大きな問題が潜んでいるのではないか、ということである。

一つは介護とともに始まる慣れない家事等生活スキルの課題。炊事、掃除、洗濯、買物、さらには預貯金の管理や近隣づきあい、役所の種々の用務、などといったこれまで妻や親に任せきってきた、家事の全般を担わないといけないということの戸惑いがある。

二つには、家族･自己責任の内面化という問題。家族のことは家族で、と過剰な家族･自己責任を背負いながら介護に没頭する、ということもよく耳にする。24 時間介護一筋の生活に接合され、社会関係と切断され閉塞感が漂う暮らしに誘導される。

三つには、経済的問題。家計の大黒柱を担う人に介護役割が始まれば、収入は激減し、支出は途方も無く増えていく。このことを支援する仕組みが現状ではない。残業も、出張も出来ずに仕事の自由度は奪われていく。

四つには、介護と仕事の両立問題に象徴される社会参加の課題。介護が始まると仕事との板ばさみで、結局は離職を余儀なくされることが大きな社会問題となっている。離職は男性の社会との接点を容易に遮断する。

以上の 4 点に集約される問題点何れもが、介護者の孤立と絶望へと誘導する要因として作用する。であれば、この孤立化への対抗措置を講じ得るか否かということは、男性介護者の今を生き抜くための手立ての構築、さらには、今を生き抜くということ自体が孤立と絶望に誘導する諸課題の抜本的な解決とどのような相関関係を有するのか、という本

研究テーマであるケアを包摂するコミュニティ開発の課題に繋がってくる。

上記の男性の介護環境の中で追及され全国に広がる男性介護者の会や集いなどのコミュニティに関して、会や集いの参加者あるいはそれを運営する主催者から以下のような声が聞こえてくる。①同じ立場の人との出会いの場、②プラス、マイナスも含めた介護感情を吐露する場、③「ひとりじゃない」ということを文字通り実感する場、④介護者の経験が生きる場(「経験知」)、⑤介護者、支援者の相互作用が働く場、等々である。

これらの声は確かに事実に依拠している。しかし、上記で言われるような効能や機能をして、このような場は「単なる愚痴の場」「傷の舐め合いの場」であり、現状では必要性があることには違いないが積極的にはその意義を認めにくい、ストレス発散の場だが消極的ではないか等々批判の対象にも晒される。何れもが当を得た肯首しうる意見ではあるが、ただ、以下のようにも言える。多くの参加者や運営者が指摘するような、同じような立場の人との共感や思いやり、気遣いは、彼らが介護によって失った既存の社会との関係を、介護という場を通して修復する場、社会との接点を修復しさらに太くしていくような場、空間、関係である。

しかも既存の社会との主要な接点が経済合理性に規定された「市場」を媒介として構成される交流が主題であると仮定すれば、この介護によって構築されるコミュニティは「市場」からは区別される家族や同じ生活課題を抱えた当事者同士、地域、友人知人という、いわば限定的制約的な小さな交流場面であることに大きな相違がある。「市場」からは自由になって、真に人間的な交流を深めうる場としてのコミュニティである。自らの介護体験が他者を励まし他者の力になり同時に他者の体験を素直に学び知恵を授かる、という教え教えられる双方向の関係性といえよう。これは、当事者同士の「愚痴のこぼし合い」という場面を遥かに超えて、人間同士の真の自由な関係性の構築という意味内容に繋がり、拡がっていく際の原動力である。

人間同士の自由な関係性とは次のようなことも含意している。「愚痴」「傷の舐め合い」は対面での顔と顔の見える場面で起こり得る感情交流であり、一を言って百を分かり合えるコミュニティ(「人称的連帯」)だ。一方、上記の人称的連帯は対面での顔と顔の見える個別で具体、特殊な関係であるとともに、さらにその先にある一般、抽象、普遍的な価値と関係性を備えたヒトに固有なコミュニティへの接続をも見据えている。社会保障や社会福祉の制度・政策もここに位置づく。「人称的連帯」に対置すれば「非人称的連帯」ともいう。介護を通して繋がろうとする「愚痴のこぼし合い」や「傷の舐め合い」という関係性は、「分かり合う」「支え合う」という人間社会の普遍的な価値や関係性というより大きな普遍的舞台に接合されるのではないか、という希望である。人間社会に固有の普遍性とは、利益追求、損得という経済合理性を遥かに超える関係性ということである。

「やむにやまれず」「ほっておけない」「思わず手を差し伸べる」という「ケアの衝動」ともいうべき介護によって繋がる人と人の関係性は、経済合理性という「市場」がつくる関係性の限界や制約を乗り越える。現状では萌芽的ではあるが、ここにケアを包摂するコミュニティが拓く希望の可能性があると私たちは考える。

男性介護ネットが主宰する介護体験記募集事業のキャッチコピー「あなたの介護体験を社会の共有財産に」は、人称と非人称のコミュニティ(連帯)を繋ぐスローガンである。

ケアのアソシエーション(介護者の会や集いなど)は、「ひとりじゃない」という確かな共感的実感に溢れている。同じような立場の人との交流は、介護生活で失われつつあった社会との接点や連帯を修復する新たな「場＝コミュニティ」となっている。

そしてこれらの「場」は、大きな一塊として編み上がっていくものではなく、そこに集合する人の属性や実態、関心、課題に即してより多様に、より細分化して組織されようとしている。共感・連帯の接点はこれまでになく極めて複雑化し狭小化する。しかしそこで発生するエネルギーはより密集化しより強力になる。この組織化の複雑性と狭小性、共感・連帯エネルギーの密集性・強力性という、アンビバレントな状況下において、それらがどのような関係性を結びうるか。今日の「ケア／ケアラーズ」を巡る環境のリアリティであるが、本研究では小さなしかし凝集性の高い活動同士が関係する弱く頼りなげな緩やかなネットワークに、本研究が課題とした「ケア包摂型コミュニティ」という普遍性に繋がる萌芽をみようと考えた。

本研究では、全国各地に生まれている「ケア／ケアラーズ」この小さな「場」を、ケアを包摂するコミュニティ開発の大きなエンジンとして有効に機能し得ること、そして既にこの巨大なプロジェクトが離陸しようとしていることを確認して、結論とした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

1. 津止正敏「仕事と介護の両立支援現場から考える－企業に求められる支援の在り方－」労務行政研究所編労政時報選書『これから始

める　仕事と介護の両立支援』労務行政研究所(2015)、32-47、査読無
2. 津止正敏「男性介護者への包括的支援の論理と根拠－暮らしと介護、仕事と介護の視点から－」『社会福祉研究(第 122 号』公益財団法人鉄道弘済会(2015)、47-56、査読無
3. 津止正敏「介護者支援を考える①②③」『国民生活(2015 年 1 月号～3 月号)』独立行政法人国民生活センター(2015)、査読無
4. 斎藤真緒・津止正敏・小木曽由佳・西野勇人「介護と仕事の両立をめぐる課題—ワーク・ライフ・ケア・バランスの実現に向けた予備的考察—」『立命館産業社会論集』第 49 巻第 4 号、立命館大学産業社会学会(2014)、119-137、査読有
5. 津止正敏<インタビュー>「『ケアメン』に必要な企業の支援とケア・コミュニティの確立」『人事実務』2014 年 6 月号、産労総合研究所（2014)、20-24、査読無
6. 津止正敏「ケアメン百万人時代の実態と課題」『中央公論』2013 年 10 月号（2013)、138‐145、査読無
7. 津止正敏「高齢者の権利擁護･虐待防止の動向」『権利擁護･虐待防止白 2013』全国社会福祉協議会(2013)、58－61、査読無
8. 津止正敏〈連載 1-3〉「介護とケアメン」『MovingVol70･Vol71･vol72』北九州市立男女共同参画センター(2013)、査読無
9. 津止正敏「ケアメンプロジェクト‐介護退職ゼロ作戦を社会運動にー」『月刊看護 Vol.64NO.11』日本看護協会(2012). 20-21、査読無
10. 津止正敏「男性介護者 100 万人時代の支援を考える」『月刊福祉増刊号 100 の論点 Vol2 』第 95 巻第 5 号、全国社会福祉協議会(2012)、96-97、査読無
11. 津止正敏「高齢者の権利擁護・虐待防止の動向」『権利擁護・虐待防止白書 2012』全国社会福祉協議会(2012)、39-42 、査読無
12. 津止正敏<新聞連載 1～12 回>「男性介護者 100 万人へ贈る言葉」時事通信配信記事（2012)、査読無
13. 津止正敏「『母親業の分担』を公的モデルで」『障害のある子どもの放課後活動ハンドブック』かもがわ出版(2011)、 106-120、査読無
14. 津止正敏「『介護者を支援する』ということ」『月刊国民生活 №40』独立行政法人国民生活センター(2011)、 17-19、査読無
15. 津止正敏「介護の社会化と介護者支援を考える-介護保険 10 年目の検証-」『福祉社会研究第 11 号. 3-21』京都府立大学福祉社会研究会（2011)、3-23 、査読無

〔学会発表〕（計 1 件）
1. 津止正敏・西山良孝「『介護者を支援する』ということの原理と方法」日本ボランティア学会 2011 年度大会、2011 年 6 月 25 日、立命館大学（京都府京都市）

〔図書〕（計 8 件）
1. 津止正敏編『男性介護者支援の論理と根拠－ケアが拓くコミュニティ－』立命館大学人間科学研究所(2015)、全 126
2. 津止正敏・西田朗子『ケアが拓くコミュニティ‐「ケアメンサミット JAPAN」活動報告書‐』男性介護者と支援者の全国ネットワーク(2014)、全 39
3. 津止正敏・緒方有為子監修『男の介護　そして、ケアメンになる－初めの一歩－』北九州市立男女共同参画センター・ムーブ(2014)、全 16
4. 津止正敏 『ケアメンを生きる－男性介護者 100 万人へのエール－』クリエイツかもがわ(2013)、 全 147
5. 津止正敏『しあわせの社会運動－人がささえあうということ－』ウィンかもがわ(2013)、全 158
6. 津止正敏･鎌田松代･斎藤真緒編『「介護退職ゼロ作戦」という社会運動』立命館大学人間科学研究所(2013)、全 156
7. 津止正敏・斎藤真緒編『家族介護者支援の論理‐男性介護者の介護実態と支援の課題‐』立命館大学人間科学研究所(2012)、全 159
8. 津止正敏編『家族介護者支援を考える-日本と英・豪・米の比較研究』立命館大学人間科学研究所(2011)、全 104

６．研究組織
(1)研究代表者
津止　正敏（TSUDOME　Masatoshi）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：70340479
(2)連携研究者
斎藤　真緒（SAITO　Mao）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70360245
(3)研究協力者
フィールドとした男性介護者の会や活動
50 団体：男性介護者と支援者の全国ネットワーク、北海道男性介護者と支援者のつどい、東川町男性介護者の会ぼだい樹の会、認知症の人と家族の会宮城県支部なごみの会、荒川区男性介護者の会オヤジの会、NPO 法人介護者サポートネットワークセンター･アラジンつくし会、かずらの会、認知症ケア町田ネット、みたか･認知症家族支援の会、介護者のつどい東大和、NPO 法人杉並介護応援団、川崎市認知症ネットワーク、山梨やろうの会、シルバーバックの会、長野県男女共同参画センター、NPO 法人生き活き岳南クラブ ほっと、NPO 法人てとりん、名古屋市南区社協、男性介護者の会みやび、ケアホームさいせい「男性介護者の集い」、福井中央北包括支援センター、男性介護者の集い

「中北の家」、甲賀市介護者の会男性介護者部会、男性介護者を支援する会 TOMO、男性介護研究会、認知症の人と家族の会京都府支部男性介護者の集い、住吉区地域包括支援センターほっこりサロン、豊中市老人介護者（家族）の会、福島男性介護者の会、妻を介護する男性介護者の会、ほっこり庵(NPO 法人スマイルウェイ)、たつの市男性介護者の会、宍粟市男性介護者の会、男性介護者の会ぼちぼち野郎、伊丹市男性介護者きたいの会、男性介護者支援ネットワークひょうご、岡山男性介護者の会、男性介護者の会（福山)、男性介護者 4 木(よんもく)の会、広島市佐伯区健康長寿課、広島市東区ケアメンの会、男性介護者ネットワーク鳥取県、社会福祉法人牧羊会ホームシオンの丘ホーム、認知症の人と家族の会福岡県支部、筑紫野市介護を考える家族の会、直方市社協・認知症の人と家族の会、認知症の人と家族の会大分県支部、認知症の人と家族の会宮崎県支部、認知症の人と家族の会佐世保支部